

対談



木津川 計 (Kei Kizugawa)  
雑誌「上方芸能」発行人



栗本智代 (Tomoyo Kurimoto)  
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

構築すべき文化産業都市  
—再び含羞都市をめざして



持続可能な都市像を模索する際、その視座として、まずは経済的側面がある。一方「文化の都市こそ、めざすべき姿である」と早々に主張されたのが木津川計さん。上方芸能を中心に、生活文化、趣味、都市経営や都市格など、幅広い知見と街や人へのあたたかい眼差しをお持ちの方である。今私たちが置かれている状況や今後の進むべき方向性等について、お話をうかがった。

## 都市経営を支える2つの要項

### — 大阪の事例から

**栗本** まず、魅力ある都市、持続可能な都市のあり様について。身近な例で大阪の場合、戦後、高度経済成長を経て、まずは経済力が重んじられました。歴史文化や観光などは軽視された時期が長かったのですが、最近になってようやく焦点が当たり、経済力にもつながると謳われるようになりました。

**木津川** 大阪では、ぜにかね「銭・金一本やり」の見方が根強かったので。その大阪の都市経営は、今2つの困難に直面しています。1つは「都市力」、経済の視座から眺めるものです。2つめは「都市格」、これは文化の視座から眺めるもの。この両方が衰退して低落しているのですね。

**栗本** 都市経営における文化、都市格は、どんな価値や役割があるのでしょうか。

**木津川** わかりやすいのが、公的機関や大企業の流出です。2007年にはカナダ総領事館、08年にはスイス領事館が大阪から撤退し、来年には、フランス領事館が京都へ移転します。民間企業では住友化学や日本生命、日清食品その他が本社を東京へ移しました。松下も重要な工場を滋賀県草津市に移すといえます。ところが、京都の企業は、一社も動かない。任天堂、京セラ、オムロン、島津製作所、村田製作所、日本電産他、企業経営者は、京都に誇りを持っている。多くの人が憧れる、グレードの高い京都は「ブランド」だと言っています。逆が大阪で、都市格の低下が企業に及び、経済力を衰弱させています。

**栗本** かつて大阪は、「大大阪」と呼ばれ、東洋のマンチエスターと異名を持つほど、経済力を誇った時期がありました。

大正から昭和にかけては、音楽、美術、建築物他、各分野で華やかなモダニズムと呼ばれる文化が花開いていました。

**木津川** 当時日本1位であった大阪府の人口は、今は3位となり、工業生産高は4位。07年度では愛知県の48兆円の半分にも満たない18兆円、1人当たりの府民所得は同年度で9位。非常に情けない現状です。

**栗本** 都市力が格段に低落していますね。数年前に、都市のブランド戦略が一種のブームになっていた時期、大阪の行政でも熱心に取り組みが行われていました。今は、都市格向上や文化振興への予算組みも厳しそうです。

**木津川** 私は、ずっと「大阪を文化の都市にしなければならぬ」と言ってきました。太宰治はこう表現しています。文化にルビをつけるとしたら「ハニカミ」だと。言い換えると「含羞がくしゆう」。つまり、文化イコール含羞として、それをタイトルにした『含羞都市へ』という本を出したのが86年です。ところがバブルの時期で、文化より土地を買うべきだと、あまり相手にされなかった。ただ、梅棹忠夫先生が「いいネーミングだ」と評価してくださいました。今は、文化を大切にしようと思いが合唱しています。大変結構なことですので、逆に私は「経済の都市へ」と言っています。都市の文化が発展するには、経済が発展しなければなりません。痩せた砂漠の中に文化の殿堂は建たないのです。都市が肥沃になるには、経済の活力、都市力が強まっていかなければならないのです。

**栗本** 都市力強化のための構想が必要ですね。

**木津川** 3つの産業を大阪に根ざした産業と把えて発展させていくべきと考えます。1つめは道修町。武田、塩野義、田辺などが本社を置く医薬品産業の集積エリアですが、研究開発力を集結してバイオ関連産業での成果に期待する。2つめは、パナソニック、シャープ、そして三洋の家電3社



の力を合わせて、太陽光発電を含めたIT関連産業を発展させる、3つめは、八尾や東大阪など中小工業力による環境関連産業に新しい活路を見出していく。これらが都市力を回復させていく中で、経済の果実が文化へ注ぎ込まれる、そういう状態に持っていきたいですね。

## 一輪文化と草の根文化

**木津川** 今は、文化には大規模投資がなされないので、抜本的な施策に取り組めない。ちまちまと、小さな花ばかり咲かせています。それを軽視してはいけないとは思いますが。

**栗本** その文化の花について、木津川先生が曰頃おっしゃっている「一輪文化」と「草の根文化」という考え方は、非常に興味深く、それぞれの役割を再認識させられます。

**木津川** 「一輪文化」というのは、都市が魅力的であるためには、優秀なクリエイター、輝くスターが必要で、この人たちが創り出し生み出す文化を、豪華に開く花一輪という意味で呼んだものです。一方、市民の中に育まれ広がる生活の中の文化を「草の根文化」と呼び、これは、アマチュア文化を建て前としています。両者は相補う関係を持っていて、鑑賞者がいないと「一輪文化」も都市に定着しません。「草の根文化」の担い手は、「一輪文化」に憧れ、また生活の中に文化を取り入れるための消費者として、文化産業を支えることになるんです。両者があいまって芸術文化は栄えるのですが、陽が当たりにくい「草の根文化」は軽視されやすいのです。

**栗本** 大阪府でも、草の根文化を支え、育てるようなセクションが廃止になりました。例えば、府立文化情報センターでは、私もいくつか企画や講座に携わったことがあります。が、熱心な受講者が印象的でした。

一方で、大阪市の観光施策で、草の根的な活動が立ち上がりました。「コミュニティ(ベースド)ツーリズム」という概念で、着地型の観光振興ですが、住民主導型でまち歩きコースを設定し、地図をつくり、そこを住民がガイドとして案内するというものです。いわゆるプロフェッショナルでない一般の方が、地域の歴史文化を勉強し、話し方を学びつつ、観光客をもてなしています。今秋で約60コースのまち歩きコースが設定されます。ガイド初心者にとつて、プロのガイドは一輪であり、また将来は、カリスマ的なガイドも育つ、という期待が持てます。

**木津川** 楽しい活動ですね。「草の根文化」というと、ママさんコーラスがわかりやすい例ですが、実は、女性の文化力には、すごいものがあります。新しい文化の潮流、うねりを女性が起こしたのは70年代後半以降。80年代には、カルチャー文化が花盛りになります。ママさんコーラスもこの頃から増え、今では大きな文化に育て上げられました。また、演劇では、70年代から小劇場が人気を得ますが、これが絶叫や大音響で、新劇を追い詰めていく。その逆風で、語りが復権して、一人芝居を促す力が芽生え、90年代から、朗読、語り文化が女性を中心に広がっています。例えば、西宮市の兵庫県立芸術文化センターが、代表的な公演ホールの一つです。

**栗本** 私も西宮市に住んでいます。公民館などで、よく「語りの会」が催されていて、地域の子供も大人も楽しんでいきます。

**木津川** 斎藤孝明治大学教授の『声に出して読みたい日本語』(草思社)の刊行から一ブームになったのですが、その前に、兆しとして、大野晋著『日本語練習帳』(岩波新書)のべ



ストセラーがありました。言葉や話し方の乱れや粗雑さから、美しく正しい日本語へと導く「日本語ブーム」が起き、そこから語りや朗読が静かなブームとなったのですね。

**栗本** 私の取り組む「なにわの語りべ」活動は、大阪の魅力や可能性をまず伝えることを目的にして、「語り」はその手法なのですが、将来的には、まさに草の根的に、「語りべ」を増やしていきたいと考えています。

**木津川** 是非、大阪の言葉を大切にして続けてくださいね。語りや朗読は、私が今一番注目している文化の一つです。

大正時代に愛された語り芸は義太夫節ですが、文楽の素人義太夫が10万人も大阪にいて「草の根文化」そのものでした。しかし今は限りなく零に近い。だから「一輪文化」である文楽を国が支えなくてはならない。哀しいことです。歌舞伎の場合は、役者が戦後ほとんど東京に行ってしまう、支えようにも、大阪に「一輪文化」がなくなってしまう。復権にはまだ時間がかかりますね。「一輪」と「草の根」両面の文化施策が必要です。

## 生活満足感を支えるもの

**栗本** 男性は、社会的な仕事に生きがいを見出す一方、それ以外の時間は、主体的に文化活動をしていない人が多い気がします。今の40代、50代の多くも立派な「濡れ落ち葉」予備軍だと思っています。一方、女性は自分らしさや生きがいを貪欲に求めて、文化活動も積極的です。もちろん、「衣食住」の基本的な欲求を満たすことが先でしょうが、次のステップで、文化に対する姿勢において、比較論ですが、男女差を



感じます。

**木津川** 男はアホなんですよ(笑)。女性は賢くなければ生活が営めない。生活の中で苦労するうちに、賢くなっていくんです。落語では、男のアホばかりが登場しますが女のアホはいません。男のアホは笑えますが、女のアホは悲劇です。幕府の教学である儒教が女性を差別したのですが、実際、無能な女性では家計を切り盛りできるはずがない。だから「尾張名古屋は城でもつ、貧乏所帯は嬢(お嬢)でもつ」と言ったのです。もちろん、男はまるでバカではない。生産点では技量を磨いて賢いですが、生活点ではダメなんです。

**栗本** でもアホな男でも(笑)、仕事以外でも生活満足を得たいのではないのでしょうか。退職後、生産点をなくして、張りのある日常を得られず枯れてしまいそうな哀しいシニアのためには、どうすればいいでしょう。

**木津川** 私たちはみな文化的な生活をしたと思っています。それを阻むのは、つまり文化の敵は何か。①貧乏、②多忙、③精神的緊張の3つです。言い換えれば、経済的ゆとり、時間的ゆとり、精神的ゆとり。生活満足感を得るには、まずは経済的ゆとりが基盤・土台になって、生活が豊かになり、心の満足をどう満たしていくか、という順序になる。70年代から女性が文化活動を活発化させたのも、60年代に、国の所得倍増計画で生活水準が格段に向上した結果です。

**栗本** 昨今は厳しいですね。今夏のボーナスが去年よりダウンした人も少なくないですし。

**木津川** 生活不安感が広がり、心のゆとりがない。先行き、見通しのつかない混沌とした時代で、閉塞感が続きます。



でも生活満足感は満たされなければならぬ。だからこそ、3つの条件を満たしていくことで、確かなものにしていくのです。

## ■ 差じらいの平和文化産業で

### 都市力向上へ

**木津川** 最後に、都市の文化的持続可能性について。大阪について話しますと、江戸と大坂には大きな違いがあります。江戸は、警護、すなわち守り固める侍のまちです。江戸期は人口100万人のうち50万人、半分が侍だった。ですから江戸の町には侍の気風が広がります。歌舞伎なら荒事になります。一方、大坂は平和都市。40万人のうち侍は400人もいなかった。100人中99人は町人で、商いにいそむ。歌舞伎なら和事。戦争がおければ商売はあがりたかりだから、平和を願いました。本来大阪人は、含羞の人、すなわち文化の人で、心優しいのです。

**栗本** 平和主義で差じらいのある今後の都市経営として、い

かに都市力を構築するか…。

**木津川** 大阪は由来、平和産業の都市だったのです。紡績やファッション産業、道修町の医薬品、生命保険も命や生活を救済する産業、家電産業も家を明るくする…。

**栗本** 最初に言われていた環境関連産業や、観光産業も平和産業ですね。

**木津川** かつて磯村隆文市長が掲げた「国際集客都市」は、何でもつて集客するのかが描けていなかった。そのとき、大阪ガスの取締役社長で大阪商工会議所の会頭でもあった大西正文氏が「都市格向上」「観光都市へ」と唱えた。市は「国際文化集客都市」と掲げるべきだったんです。そのような観光産業も含めた平和産業、差じらいの文化産業の伝統を見直すことが大切です。

**栗本** 行政も財界も手をとって、その土地の気質や、育まれてきた文化を産業として改めて再構築することで都市力をつけ、都市格を高めていく、ということですね。本日はありがとうございました。

CEL

**木津川 計** (きづがわ・けい)  
雑誌「上方芸能」発行人

1935年高知生まれ。大阪市立大学文学部卒業。68年に自ら創刊し、編集長を務めた雑誌「上方芸能」は、京阪神の芸能や大阪文化を幅広く紹介・論評する専門誌として40年を越える歴史を有する。86年から2006年3月まで立命館大学教授。また現在「木津川計の一人語り劇場」を主宰。主な著書は、『含羞都市へ』（神戸新聞出版センター）、『都市格と文化—大阪から全国へ』（自治体研究社）、『人間と文化』（岩波書店）、『上方の笑い』（講談社現代新書）、『上方芸能と文化』（NHKライブラリー）など。

**栗本 智代** (くりもと・ともよ)  
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

1988年奈良女子大学家政学部生活経営学科卒業。大阪ガス(株)に入社後、91年より現職。研究領域は、関西(特に大阪)の活性化をめざした都市の個性や魅力の探求。音楽的演出をまじえた「なにわの語りべ」公演活動としても発信する一方、まち歩きを主体とした「コミュニティ・ツーリズム」の推進や「大阪検定」の企画にも取り組む。主な著作は、『大阪まちブランド探訪』（創元社）、『大阪水の都に浮かぶ劇場』（KBI出版）、『大阪力事典』（共編著、創元社）など。

